

波照間島の芸能

—ムシャーマを中心に—

當 間 一 郎

(1)南波照間伝説をもつ島

わが国の最南端の島である波照間島は、パイハティローマ伝説を生んだ、メルヘン的な島である。琉球王国時代にできあがった伝説の一つと思われるが、島の外にすばらしい理想郷を想定し、心踊らせたのであろう。これまで波照間島に何度か渡ったが、絶海の孤島にたたずむと、その伝説の生まれたゆえんが容易に理解できる。島に住む人たちが、外にすばらしい楽天地を想像したのは、正常な心理といえるようだ。

『沖縄大百科辞典』（沖縄タイムス社）に、「パイハティローマ」について、次のように記されている。

南波照間 パイハティローマ 1648年（尚質1）八重山波照間島の島民が逃亡したと伝えられる地。『八重山島年来記』にもその記録がある。島では＜その逃亡は人頭税の重圧に耐えられなかったため、行く先はパイハティローマとよぶ南方の樂園である＞と語り伝えている。（後略）（牧野 清）

このような状況は、与那国鬚川（ヒナイ、比川）にも「南与那国」伝説があると牧野氏は記しておられる。このような話は、この二カ所のみではなく、似通う立地の島には少なからずあったとみるのが穏当であろう。島の外に樂園を求めるのは、いつの世にもあることで、苦しければ苦しいほど、人間の求めてやまない心理状態であろう。

この伝説をもつ波照間島は、きびしい自然と相対してきているので、幾代もの人たちが、シマチャビ（島痛み。孤島苦、離島苦）を味わってきたのである。たび重なる自然の驚異を島の人たちは心を一つにしてはねのけてきたのである。その原動力は、多くの年中行事に見ることができる。

旧暦2月、6月、9月の年三回の「シマフサラー」（疫病払いと健康祈願）、旧暦5月、8月、12月の年3回の「ヌブリ」（天候と航海安全祈願）、旧暦9月、10月、11月の年3回の「ツクリニゲー」（農作物の豊穡祈願）、旧暦4月、6月、9月の年3回の「アミニゲー」（雨乞い祈願）、旧暦2月、6月の年2回の「トマニゲー」（泊願い、天候・航海安全祈願）、旧暦6月に4日間（以前は6日間）行われる「プーリン、アミジワー」（豊年祭）、旧暦8月に4日間行われる「シツシン」（節祭）、旧暦9月から11月頃に行われる「タナードリ」（種子取祭）等、実に多くの行事をくりかえして、自然を慰撫しながら五穀豊穡と健康祈願を、島あげてつづけてきたのである。このように離島には、沖縄本島の各村落に見られぬ

神事が古くからあり、島の人たちの心の支えとして行われてきているのである。波照間島の豊かさと繁栄は、数多くの年中行事で約束されてきているといっても過言ではない。

波照間島には、早くから多くの研究者が渡り、パイハティローマの伝説をもつ島の歴史と文化の有様をくわしく書き残されている。くわしくは文献一覧等でごらんいただき、たしかめてもらいたい。他の島から波照間島へたどりつくのに波照間玄海を通らなければならなかったという。今日では、快速船の就航で一時間たらずで着くが、昔は、そう簡単にはいかなかったようだ。昭和14年10月発行の河村只雄著『南方文化の探究』第3篇「八重山文化の探究」6「波照間玄海の荒波」は、当時の航路のきびしさを書いている。5月24日だったというから、台風期でもなかったろうが外海のものすごさに出あったのだろう。このようなきびしい中も、明治・大正・昭和初期までに、多くの研究者が競うようにして渡島している。それほど学問的に魅力あふれる島であり、心ひかれるところなのである。

(2)歌謡にみる島人の生活

波照間島には、古くから多くの歌謡がうたいつがれてきた。しかし、今日、そのほとんどがうたわれなくなり、文字記録で伝承されているのが現状である。加屋本正一著『波照間島』第7章「波照間島の歌」の古謡の項をみると、喜舎場永珣著『八重山古謡』（昭和45年、沖縄タイムス社）から、島に関する古謡のアユ、ジラバ、ユンタ、ユングドゥ21首の題名を記して、「これらの古謡は、残念なことに波照間島でほとんどが忘れさられ知っているものはいない」と縮めている。また、『波照間島のムシャーマー南国の豊年祭と祖先供養の祭典ー』（昭和57年、波照間民俗芸能保存会）には、「また昔は『波照間の人とはユンタ、ジラバなどの歌のカケ（競争）はするな』と言われるほど古謡が盛んであったと言われ、また年間をとおしてみごとにしくまれた祭政一致の年中行事の豊かさは当時の高い文化のレベルを物語るものであろう。」とあり、「夏期の共同作業（夏ボー）の時期に壮年男子が鰹漁に出るために『夏ボー』でさかんに歌われたユンタ、ジラバなどの古謡の練習、伝承が困難になり、それほど豊富にあった古謡が衰退の一途をたどるようになったことは残念である。」と記されている。

外間守善、宮良安彦編『南島歌謡大成、八重山篇』（昭和54年10月 角川書店）には、前述の喜舎場永珣著『八重山古謡』から収録した古謡の他に、宮良高弘著『波照間島民俗誌』（昭和47年、木耳社）所収の「願い口」が17、「フミシシヤギ」が2収録されている。これらの中から、アユとジラバ、ユンタを一首ずつ紹介する。

ぶばなあゆ

- | | |
|------------|----------|
| 1. イヤヨーヨーホ | イヤヨーヨーホ |
| 今日ぬ日ぬ黄金日ば | 今日の日黄金日を |

- | | |
|------------|-------------|
| ホーイ | ホーイ |
| いらびわるよ | 選びなさる |
| 2. いなぬばな | 稲花 |
| すりばな | すりの花 |
| いでやおり | 出なさり |
| 3. 八合びんば | 八合のびんを |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 4. 九合ぬばな | 九合のはな米を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 5. 五ちぬ盆ば | 五つのお膳を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 6. 七ぬ盆ば | 七つのお膳を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 7. かこなぬ盆ば | カコナ（菓名）のお膳を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 8. ぶばまきやら | 叔母たち皆を |
| ちいかいし | お招き |
| わるよ | なさるよ |
| 9. ぶなりきやら | 姉妹たちみなを |
| ちいかいし | お招きし |
| わるよ | なさるよ |
| 10. 願いまり | 祈願して |
| 手じりや | 手摺りし |
| わるよ | なさるよ |
| 11. ぶばまきやら | 叔母たち皆の |
| あとうん | あと |
| にやんよ | にはね |
| 12. ぶなりきやら | 姉妹たち皆の |

あとうん	後
にやんよ	にはね
13. 親びちゆぬ	ご先祖の
あとうん	後
にやんよ	にはね
14. 村中きやら	むら中皆
ばがきやら	私達皆が
願いわるよ	お祈りなさる

このアユには、吉日を選ぶこと、神前へのお供えものに最善を尽し、叔母姉妹たちが祈願し、そして最後に村落共同体の構成員でお祈りし、感謝の意を表するという光景がうかがえる。五穀豊穡への願いと感謝は、村落共同体のもっとも重要な行動であった。

なしいな村うにぬやじらば

1. なしいな村 うにぬや
 ばがかぬしい ふなしどう
 (ナシナ村の宇根(船)の親)
 (私のいとしい船船頭)
2. うにぬやとう ばぬどうや
 ふなしどうとう くりとうや
 (宇根の親と私とは)
 (船船頭とこれ(私)とは)
3. やるびから みゆとうぬ
 くゆさから うちぐぬ
 (こどもの時からの夫婦で)
 (小さい頃から一緒に)
4. ならふどうぬ いぐだら
 たきふどうぬ むいだら
 (自分の身長がのびると)
 (背丈が大きくなると)
5. なぐばんみしや ゆむみしや
 ちいとうばんみしや ゆむみしや
 (投げててもよいマアよい)
 (捨ててもよいマアよい)

6. うやぬ家でん ありどうしい
ぶにぬ家でん ありどうしい
（ 親の家もあるのだ ）
（ 母親の家もあるのだ ）
7. うやぬ家ぬ ちいむざにん
ぶにぬ家ぬ しいざむとうに
（ 親の家の下座元に ）
（ 母親の家の下座元に ）
8. ちいくいとうり ぴりいどうしい
しるぶむと かつみどうしい
（ おけ 麻笥を取って座るのだ ）
（ 白苧麻糸を紡ぐのだ ）
9. ちいくいとうりぬ 思いぬ
かいぶとうかちやみぬ 思いぬ
（ 麻笥をとつての思いは ）
（ きれいな苧麻を紡いでの思いは ）
10. ばが夏ぬ なりよたら
南夏ぬ たちゆだら
（ 若夏になると ）
（ 南風の夏が立つと ）
11. うにぬやぬ くとうばうむい
ふなしいどうぬ なかば思い
（ 船の親のことを思い ）
（ 船船頭との仲を思い ）
12. あむる酒 まらしようり
米神酒 しくみようり
（ 泡盛酒を造りなさり ）
（ 米神酒を仕込みなさり ）
13. みしやぎばな むちやいいき
ふなむとうに ばりやいき
（ 美崎浜へ持っていき ）
（ 船元へ走っていき ）
14. とうまやどうりい しいたなが

浜やどうりい 内なが

(苦宿りの下に
浜宿りの内に)

15. うにぬやーや くまおるんに

ふなしどうや なまおるんに

(宇根の親はここに居られるか
船船頭は今おられるか)

16. ばがぶりば なゆすでい

くりぶりば いかすでい

(わたしはいるが何をするか
これはいるが如何するか)

17. うにぬやぬ ふなむかい

ふなしどうぬ みちいむかい

(宇根の親の船迎え
船船頭の路迎えのため)

18. あむるざぎん むちるける

まいみしやぐん しいだしどうける

(泡盛酒も持ってきた
米神酒も造ってきた)

19. ぬみてみちぬ 泡盛酒

ぬみてみちぬ 米みしやぐ

(飲んでごらんよ泡盛酒
のんでごらんよ米の神酒)

20. あむるざぎぬ かていむぬ

たくぬびち かていむぬ

(泡盛酒の肴は
乾しタコのけずりもの)

21. まいみしやぐぬ かていむぬ

あいなずぬ かていむぬ

(米神酒の肴は
みそのあえ物が肴である)

22. かみていみらぬ たくぬびてい

はいていみらぬ あいなず

（ たべてごらんよ乾しタコの削り物 ）
 （ たべてごらんよみそのあえもの ）

波照間島には、昭和初期頃まで、このような村落共同体の様子を把握するに格好なジラバが数多くうたわれていたと思われる。このジラバは、島の海上交通を司る船頭をうたいこんだもので、典型的な相聞歌になっている。ナシナ村の字根の親（船頭）を大きくうたいおこし、こどもの時分からの夫婦で幼ない頃から一緒とつづけていく形式は、古謡によくみかける手法で、のびのびとしたうたい方である。^{おけ}麻笥がうたいこまれ、白苧麻糸を紡ぐ行為が見られるのも、島の女たちの日頃の仕事の様子がうかがえておもしろい。「若夏」「南風の夏」と、季節感があふれる表現でうたい進められている。泡盛酒を、米神酒を美崎浜、船元へ運んでの宴も、いかにも健康的で、共食、共飲の風習を強調している。全体は、古代社会の集団生活をうたい込んで、かぎりない豊かさを見せてくれている。このような類のうたは、波照間島はもちろんのこと、他の島でもさかんであり、うたい踊る全身で喜びを表現していたにちがいない。

まにむるぬいしきまゆんた

1. まにむるぬ いしきやま

やながぶる きいむねぬ

（ マニムル家のイシキヤマ（女名）は ）
 （ 家にいる気持ちがない ）

2. しいとうむでいに うきちより

あさばなに すりちより

（ 朝早くに起きて ）
 （ 朝まだきに元気づいて ）

3. 前ぬぞうに いでいるば

あがりよかい みやぎりぬ

（ 前の門に出ると ）
 （ 東の方を見上げると ）

4. たるでそんどう みらりる

じりでそぬどう くよまり

（ 誰が見られる ）
 （ どんな者が拝まれる ）

5. たるでんや あらぬそ

じりでんや あらぬそ

(誰でもないよ
どんな者でもないよ)

6. かなびらとう うがまり

ましびらとう くよまり

(加那兄が見られる
真勢兄が拝まれる)

7. かぬびらとう そんだんばし

ましびらとう だんがんばし

(加那兄と相談をして
真勢兄と談合をして)

8. まつこんぬいんかい そだんばし

ばしよちいぬいんかい だんがいばし

(ヤシガニの洞穴に行く相談をし
バショウチの洞穴に行く談合をして)

9. むぎぬんぼんば なりむら

あこんぬんぼんぬ なりむら

(麦のごはんを盛り持ち
芋のごはんを盛り持ち)

10. むぎぬんぼんぬ かちむぬ

びるかちいどう かちむぬ

(麦のごはんのおかずは
蒜漬けがおかず)

11. あこんぬんぼんぬ かちむぬ

みしゆますどう かちむぬ

(イモのごはんのおかずは
みそと塩がおかず)

12. ぶたでいるんに いりやむち

ならでいるに ふないむら

(蓋付き箆に入れて持ち
自分の箆に備え持ち)

13. かたちいんねぬ 道から

いしゃらねぬ 道から

(形もない道から
石ころのない道から)

14. ぶたでろや びじいぬき

あがべらや ばしいほうし

(蓋付き箆は脇にぬき
自分の麻笥は脇にはさみ)

15. まこんぬいんぬ ばいやご

ばしよちいぬいんぬ にしいぬやご

(ヤシガニの洞穴の南隅の隠れ場
バショウチの洞穴の北隅の隠れ場)

16. たるですんどう びざやわらどう

じりですんどう びりやわる

(何という者がすわっているか
どれという者がすわっている)

17. いりぬびーかい みやぎりば

ゆーびーかい ながみりば

(西の岩礁を見上げたら
ユー岩礁を眺めると)

18. ましびらや いらぶちいちひちんし

かにびらや にばらじんちいんし

(真勢兄はイラブチ魚を釣り
加那兄はニバル魚を釣り)

19. いらぶちい魚 なましし

にばる魚 ぬにばし

(イラブチ魚は膾にして
ニバル魚は潮煮にして)

(アユ、ジラバ、ユンタとも『八重山古謡』より引用する。)

ユンタは、前途のアユやジラバよりもくだけた内容と雰囲気をもち、より日常的な感を強くもっているように思われる。「マニムル家」のイシキヤマという娘が主人公になり、二人の男性加那兄と真勢兄を登場させて、一日の生活の様子を明るく、動的に展開させていく。イシキヤマが健康で行動力に富む娘として大きく写し出され、奔放なる性格の持ち主としてうたいあげられている。ユンタは、集団作業の場の栄養促進剂的な歌謡で、多彩な

内容がうたわれ、明朗性に富むものが多い。麦飯、イモ飯、蒜のつけもの、みそと塩のおかずなど、村落共同体内の生活がよく描かれ、ピー（岩礁、干瀬）、イラブチャー、ニバルなど、生活の場や海の幸が登場するなど、ユンタのもつ庶民性をじゅうぶんに表現しているといえよう。波照間の人たちの日常生活もこれら多くの歌謡から見るかぎり、海の幸、山の幸にめぐまれていたにちがいない。

節歌は、今日でも三線にのせてうたわれ、保存・継承がはかられている。昭和50年11月26日付で「波照間伝統芸能」として、竹富町指定の無形民俗文化財となり、民謡・舞踊の部として「波照間島節」「夜雨節」「祖平花節」。「波照間島節」「夜雨節」「祖平花節」「太鼓（テーク）」があがった。そして平成3年9月11日付で追加指定され、「波照間口説」「世界報節」が加わった。また、「波照間島のムシャーマ」が、昭和56年2月24日付で、沖縄県の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択され、昭和55年度、56年度の二カ年にわたり、調査が行われて『波照間島のムシャーマー南国の豊年祈願と祖先供養の祭典一』（昭和57年3月。波照間民俗芸能保存会）という報告書をまとめている。なお、平成5年11月26日には、国選択の「記録作成等の無形民俗文化財」になり、ムシャーマを中心とする伝統芸能が高く評価されている。

(3) ムシャーマにみる芸能

沖縄本島や宮古、八重山で、奉納芸能が数多く組まれて演じられるのは、豊年祭や結願祭）であろう。八重山でいえば、四箇の豊年祭では綱引きがあり、各オン（お嶽）を中心に、一年の豊穡と無事息災に感謝しての奉納芸能が、はなやかに演じられる。鳩間島、黒島の豊年祭でも、多くの芸能、舟こぎ、綱引きがある。そして竹富島のタントウイ祭、小浜島、川平等の結願祭、西表組納や星立等のシツ（節祭）でも、多くの踊りや舟こぎ等があって、むらをあげての感謝祭になっている。しかし、ここ波照間島では、旧暦6月の庚寅から4日間（以前は6日間だったという）、プーリン、アミジワ（豊年祭）があるが、他の地域に見られる芸能番組は、現在はない。報告書『波照間島のムシャーマ』によると、「年間の最後で最大の神行事でユヌシュピ（世の首尾）ともいわれ、当年の豊作感謝（プーリン）と来年の豊作の予祝祈願（アミジワ）の二つが行われる。シヌザラ（角皿）、ナガザラ（中皿）カンシン（神客）の雨乞いのパンなどの歌と祈願、巻踊りと神踊りなどの芸能で、島全体をあげた最大の行事である。」と説明されている。

この内容からすれば、奉納芸能の数々とか、豊年祭のハイライトとしての綱引きは、この期間で以前には行われていたものを、ある時期に何かの事情で別に移されるか。とりやめを余儀なくされたのであろう。ムシャーマの報告書には、そのところを次のように解説されている。

- (1) この行事は、かつてはその年の豊年を感謝する4日間の「プーリン」(1日目はミワクチェー、2日目はカンパナ、3日目がプーリン、4日目はプーリンのアサヨイとスケバラ)とその20日後に行なわれる来年の豊作を祈願する2日間の「アミジワ」(1日目はアミジワ、2日目がエンヌユニゲー)に分けられて行われていたが、戦後の混乱期に生活改善の名目で「プーリン」と「アミジワ」が合併されて6日間連続して行われるようになり、更に1969年(昭和44年)に両行事あわせて4日間(1日目はミワクチェーとカンパナ、2日目がプーリン、3日目がアサヨイとアミジワ、4日目が最後のアサヨイとスケバラ)に短縮され、現在に至っている。
- (2) 波照間でもその昔はプーリンの「エンヌユニゲー」(来年の豊作祈願)の日(アミジワの2日目)に仮装行列と綱引きが行われていたと言われる。島のほぼ中央の前部落の前野家の西、親盛家の東を南北に通る道路を境に東西にそれぞれ東組、西組に島を二分して綱引きが行われていたと伝えられている。その場所は不明であるが、オーセー(公民館)のサンシキ(案内客席)の位置から考えると、現在のオーセーの前の東西に通るタカタミチだと考えられる。綱引きでは、島の元村になる西組が勝てばその年は豊作になり、負けたら凶作になると言われていた。その勝敗をめぐる東西両組の村立抗争は絶えることなく、特に前部落は同じ部落民が東西に分断されるので、部落内での喧嘩沙汰が多く、プーリンの厳粛な日に血の雨を降らす事件が絶えなかった。
- (3) そこで、神聖なる神行事の日に喧嘩沙汰は不祥事として島の役人(首里大屋久か目差役か不明だが権限の高い首里大屋久の役割が大きかったと思われる)の命により大改革が断行されたとのことである。即ちプーリンはもっぱら御嶽での祈願と雨乞い、巻踊りなどが中心とした神行事になり、喧嘩沙汰の原因となった綱引きは全廃され、またプーリンの仮装行列は旧暦7月のソーリ(盆祭)の中の日の「ムシャーマ」に合併されて行われるようになったとのことである。(14、15ページ)

この記述から、今日、旧7月ソーリ(盆祭)で実施されているムシャーマの仮装行列と、今はない綱引きが、以前にはプーリンで実施されて、本来の姿を保ちながら、五穀豊穡と共同体構成員の健康への感謝の喜びを表現していたことがわかる。それが特に綱引きで、毎年のように喧嘩沙汰で、島の役人の命で全廃になったということがわかる。それにほぼ同時代に旗頭問題で大論戦、大乱闘にもなったという。

綱引きで東西により喧嘩がおこるのは、沖縄本島各地でも以前はたびたび見られたというが、その大小、軽重がこの波照間島のような結果を招いたのかも知れぬ。その事件がいつごろであったのか、また、奉納芸能がいつごろから旧暦6月から7月へ移されたのかは、定かでない。旗頭問題(カシラームンドー)は、報告書の出た1982年の時点で「130年か

ら150年前」とあるので、今日からすると十数年を加えて、1853年頃から1833年頃になる計算だ。島の役人が相当な権力をふるっていたことはたしかであろう。7月13日から盆入りで、各家で亡くなられた親兄弟やご先祖を、お墓から家にお迎えした翌日1日の行事になっている仮装行列と奉納舞踊は、まさに盆と正月が一緒になった忙しさの中での行事になっている。

旧暦6月のプーリンでは、お嶽での祈願と雨乞い、巻踊り、神踊りだけだという。沖縄本島でも旧暦7月の盆あけに奉納芸能（村踊り）を行なうところがある。名護市字久志や知念村字知名のヌーバレー等が、その代表的な行事といえよう。波照間島では、最近のいい方としての「仮装行列」ということばを使い、各組の道ズネーイ（揃い）を呼んでいるのである。

筆者は、以前から「ムシャーマ」という名称に、たいへん興味と関心をもって、その語源は何だろうと考えたりした。時期になると、必ず新聞での紹介があるし、もりたくさんのプログラムにも、興味しんしんたる思いを持ちつづけていた。しかし、旧盆の中の日にあたることから、なかなか出かけることができなかったのが本音である。それは長男ということもあり、この3日間は家にいることをモットーにしていた。それは母が「旧盆には「フリムン（気の狂れた者）ヌンチョウン（でさえも）ムドゥティチューンドゥ（戻ってくるんだ。）」と口ぐせのようにいっていたので、出かけることができずに、やっと総合調査で思いきって見学することができた次第である。

「ムシャーマ」の語義について、報告書には不明としながら、①ムッサーハー（面白いこと）からムシャーマという。②中国または南方で「ムシャー」（武者、猛者、亡者か不明）なる者がいて、それに関する祭り。だと伝わっていることを紹介している。玉城功一氏はこの他に、昔、ムシャーという人がおり、東西両部落がプーリンの祭、旗頭問題や綱引き争いことが絶えなかったので、ムシャーが中にはいり、大改革を断行したので、その人の名前が行事者になったのではないかといわれている旨を語っておられた。面白い説と人名説は、両方とも決定的なものとはなりえない感じがする。今後の解明に期待したい。

(4)ムシャーマの行列、庭・舞台の芸能

この番組は、平成8年8月27日（旧暦7月14日）のものである。午前9時頃から、島の中央公民館のタカタミチの広場で、各お嶽の司や諸役員、島の人たちの見守る中で、にぎやかに行われた。30分前の8時半頃から東組（南部落、北部落）前組（前部落）、西組（富嘉部落、名石部落）に動きがあり、徐々に行列をはじめの場に集まってきた。行列は午前9時頃からはじまり、午前10時頃に終了した。各組の行列の構成は次の通り。

1. 東組の行列 ①大旗（「東」の文字と「太陽」の図柄あり）。②ミルクの実（竹に実も

のをいっぱいつけている)。③ミルク (弥勒)、椅子持ち、女児両手にあわ、稲を入れたかごをもち出る)。④老人 (9人が本式、7人でも可)。⑤童子2人 (あわ、きびを持つ)。⑥若衆5人。⑦マミドーマ (16人、大人の男子2人がハヤシを入れながら先導する)。⑧狂言 (1人出る)。⑨六調 (4人出る)。⑩稲すり節 (ひき白を意味する白い布持ち3人、稲1人、箕【ミージョーキー】持ち2人、キネ2人、俵マス持ち1人)。⑪かつお釣り、⑫馬舞者4人 (馬の型どりをつける)。⑬ブーブザー (ししぶともいう)。⑭狂言衆。⑮久高ぶし (3人、櫓をもって踊る)。⑯棒 (ティンペー、なぎなた、鎌、なぎなた、なぎなた、なぎなた、六尺棒、なぎなた、六尺棒、ドラ、タイコ、ボラ、笛)。⑰獅子 (獅子囃子も出る)。9時20分頃に終り、公民館に入る。

2. 前組の行列、①大旗 (「五風十雨」の文字ある)。②小旗 (のぼり旗、4つの旗あり、「人心一致」「万世豊祿祈祝」「寿民富祿」「天下泰平」と書かれている)。③ミルクの実 (竹に穀物のナーリ (実) をけたもの)。④ミルク (弥勒)、椅子持ち5人、⑤老人 (10人、三線2人「老女」)。⑥マミドーマ (児童5人)。⑦稲摺 (婦人モンペ姿、ひき白を示す布持ち二人、箕持ち2人、俵持ち1人 [男]、稲穂持ち1人 [女]、キネ持ち2人)。⑧ヤシガニ。⑨若衆4人。⑩六調4人、三線1人。⑪与那国のマヤ小 (10人、芭蕉衣をきた女性)。⑫かつおつり (漁とり)。⑬馬舞者3人。⑭四つ竹 (6人)。⑮ししぶど。⑯狂言。⑰棒 (なぎなた、なぎなた、かま、なぎなた、大刀、なぎなた、六尺棒、なぎなた、六尺棒、六尺棒、ドラ、ボラ貝、タイコ8人、笛3人)。⑱獅子 (獅子囃子出る)。すべて終了したのは、午前9時35分すぎであった。9時45分頃から西組が始まる。

3. 西組の行列 ①大旗 (「祝豊年」の文字ある)。②ミルクの実③ミルク (ここの弥勒は女性だという。静かな動きをする)。椅子持ち (児童)、こどもたち10人余つく。④老人9人。⑤若衆4人。かりゆし節で踊る。⑥マミドーマ10人 (カマ3人、クワ3人、ヘラ4人)。⑦稲すり (ひき白を意味するひも持ち2人、稲1人、箕持ち2人、俵1人、キネ2人)。⑧天川8人 (二才踊りの着付4人、着流しの着物4人)。⑨馬舞者5人。⑩クバ笠を持つ踊り11人。⑪与那国のマヤ小10人 (芭蕉衣をきる)。⑫土人踊り。⑬フサマラー3人。⑭狂言 (かつおつり)。⑮棒 (テンペー、なぎなた、大刀、なぎなた、かま、六尺棒、六尺棒、なぎなた、六尺棒、ドラ2人、タイコ8人、ボラ、笛5人)。⑯獅子舞 (獅子ハヤシも出る)

午前9時頃からはじまった東組、前組、西組の行列は、午前10時頃に終了し、中央公民館の中庭で、棒や太鼓の演技が午前10時5分頃から、東組、前組、西組の順に披露された。まず東組の棒は、①テンペーとなぎなた、②かまとなぎなた、③なぎなたとなぎなた、④六尺棒となぎなた、⑤六尺棒と六尺棒であった。最後は、全員による演技があり、東の棒をしめた。次に太鼓の演技が力強く行われた。太鼓は四組構成で、先頭の4人は笠を持つ2人が立つ。そのあとに4人ずつの2組 (8人) の太鼓があり、その後に笛2人がつづく。

太鼓の打ち方は、1人が持ち、他の1人が打つ2人1組で、大役を果たす。

前組の棒は、①なぎなたとなぎなた。②かまとなぎなた。③大刀となぎなた。④六尺棒となぎなた。⑤六尺棒と六尺棒であった。最後に全員による演技があつて終る。そして太鼓が披露された。笙4人、太鼓8人（2人1組で打つ）、笛4人で、若さの太鼓芸を見せた。

午前の部の最後は、「ニンブチャー」（念仏踊り）を各組の棒シンカ、各村役員、公民館役員で二重の円をつくり、内側に棒の着付をした二才たちや役員14人、その外側にも棒シンカと役員たち28人ほどすわり、「親ぬ御恩」（無蔵念仏）の歌がはじまると、円陣の棒シンカ等は右まわりにウサギ跳びし、歌のあいだに立ちあがり、左まわりしながら「ハーリカ ヨイサー シッサーサーサー スリサーサー」とはやしてもちあげる。この「ニンブチャー」のねらいは、成仏できない無縁仏を、村人たちが共同でなぐさめ、故人をしのびつつ感謝することであるという。その日は、音取りにあたる人はなく、テープにふきこまれたものを全員でうたうという方法で進められた。当日、配られた歌詞は、次の通りである。

なむあみだぶつは みだはぶとき
うやぬよーうーぐや フワふかきむぬ
ちちぐぬうぐぬや やまたかさ
ばばぐぬうぐや フワうみふかさ
やまぬよーたかさや さばはがりる
うみぬよーふかさ ハヤさばがるぬ
ひるやよーちちぐぬ ぴさがうい
あおきいぬかーじま ハでんあううがさり
すゆぎぬかじまでん すゆうがさり
ゆるやよばばぐ フヌふちぐるに
むむやはたやら んぞがうち
ぬりたるかたどう フヤうやがかた
かわちよるかたどや ふあーがかた
むるどうよーぬりば ハヤんにがうい
くりふどうちちぐに うむわりてい
ありふどうばばぐ フニすだていらり
わんがよーとしゆみば とうばたちなり
とうばたちなるま ハでいんうぐんしらぬ
むぬぬよーあさまし くとうどうやる
なむあみだぶつは めだはぶとうぎ

しゅんじゅないむとう むとういや
うーやぬ ああとうどうやる
ヘーサヨイ ヨ サイイ
ハーリカヨイ サーサー スリサーサー
南無阿弥陀仏は 弥陀仏
親ぬ御恩や 深きむぬ
父御ぬ御恩や 山高さ
母御ぬ御恩や 海深さ
山ぬ高さや 察知りん
海ぬ深さや 察知りぬ
昼やよ父御ぬ 膝が上
扇ぎぬ風ん あうがさり
涼ぎぬ風にん 涼がさり
夜はよ母御ぬ 懷に
十重ら二十重 衣装が内
濡りたる片身や 親が方
乾ちよる片身や 子が方
全身濡りば 胸が上
くり程父御に 思わりてい
あり程母御に 育てらり
我んがよ一年数みば 十二十歳なり
十二十歳なるまでいん 御恩知らぬ
物のあさまし 事どやる
南無阿弥陀仏は 弥陀仏
仲順ないや元いや (尊重なる徳目や)
親ぬ後どやる

この「ニンブチャー」(念仏踊り)は、死者をなぐさめるもので、旧盆の中の日の大きな行事であるはずだが、円陣をつくる14人と28人の人たちのみの行事になっている。『波照間島のムシャーマ』によれば、「昔はムシャーマに参加した人々全員で、このニンブチャーに参加して解散するのが掟であったが、しだいにソーリン(精霊祭)ムシャーマの中心となるこのニンブチャーが衰退してきて、今日では村の役人と棒シンカーだけであるようになって」と古老たちは指摘される。その原因は午前中の仮装行列の中庭の演目のテーク、

棒の後に最後の演目として組まれるようになったから部落民はニンブチャーに関心がなくなり、早々と昼食へと帰宅してしまうからだ。故仲本信幸氏は指摘されその改善案を略図で図示され、提起される。」とまとめて、ニンブチャーの歌詞紹介の後に、仲本信幸氏の「精霊祭の慰霊の祭典と念仏舞踊（改革への提言）」として、次の文が紹介されている。

(1)この行事は往時ムシャーマ（盆踊）の始めから挙行された。精霊祭の祭典でこの催しがムシャーマの第一点であるのは祖霊を慰める所謂祖先崇拜の精神（信仰）から象徴されているのである。

(2)それでユーニゲー（豊年）の午前の行事（仮装行列）が終ると直ちにこの念仏舞踊の祭典に参観者も含めて全員が参加し（15分間）ムシャーマの初興しをして全員解散して帰宅し、仏前に昼食を供え、昼食を済ましてから午後のムシャーマの行事の舞台舞踊、コームッサーと棒踊、太鼓・獅子舞をするのがその趣旨にかなう順序である。しかし棒踊と太鼓を先にして、念仏舞踊を最後にするから念仏を軽んずるようになって参観者は帰宅してしまうので念仏舞踊を先にする必要がある。日程の関係を配慮して行列の直後に参観者も全員で念仏舞踊をやり、続いて棒踊、太鼓をやって午前中の行事を終り、昼食を済まして午後の日程に入るように改革することが精霊祭の中心となる念仏祭典を重視する趣旨にかなうものである。（99ページ）

行列を終えてからの行事の順序は、今のままでも不自然さはないが、仲本氏が強調しているように、「ニンブチャー」の頃になると、村人や見る人がごくわずかになり、「ニンブチャー」に参加する人もほとんどいない。中庭にいるにしても、全員が参加していないようだった。前述したように、二重の円陣の内側に14人、外側に28人がいて、この人たちが小さく口ずさんでいるという状況である。一つの敬虔なる行事としては、さびしさを感じた。やはり仲本氏がいわれるように、村人みんながこの行事に参加すべきであろう。その場に居あわせた者として、この行事は形骸化しているように見えた。行列や棒、太鼓のように、にぎやかさ・はなめかさのない行事であるが、旧盆の中の日の大事な行事であるならば、村人全員と参観者が加わって、もっと厳粛かつ真剣にやるべきであろう。この行事は、波照間島以外ではほとんど見られないし、祖霊や物故者、無縁仏等、島の歴史と文化にかかわり、見つめてきた亡き人の供養は、ムシャーマの大きな行事の一つとして、もっと本格的な行事にしてもらいたい。仲本氏が提言しているように、行列、ニンブチャー、棒、太鼓という午前中の行事が、村人一人一人の行事として自覚され、意識化されることを期待したい。

平成8年8月27日付、波照間公民館が配布した「ムシャーマ行事日程表」を見ると、次の通りである。

午前の部

1、司と公民館役員によるムシャーマ行事開始のあいさつ

2、行事開始のドラ打ち鳴らし（三ながし）

3、ミチサネー（仮装行列）開始……午前9時

行列順……①東組 ②前組 ③西組

ミルク…… 東組………阿利盛八

前組………越地信一

西組………安里 正

4、公民館中庭でのボー（棒）、テーク（太鼓）

東組……前組……西組の順

5、ニンブチャー（念仏踊り）

各組棒シンカ、各村役員、公民館役員並び一般の皆さん

午後の部………開始1時30分

1、舞台で余興（舞踊とコンギ）

①東組 ②前組 ③西組の順 プログラムは別紙 コウムッサー（東組）

2、獅子の棒（西組） 獅子舞（三組）

3、ミチサネー（帰りの仮装行列）

①東組 ②前組 ③西組の順

4、シャースケー（栈敷）でのユニガイ

ミルク節、ヤラヨー節（来賓、公民館役員）

今日では、公民館活動の一環行事として定着した、島の一大行事であることが、この日程で知ることができる。午前午後の演目のわけ方はスムーズであり、見ていてもよかった。最近では、どの地域でもそうだが、祭りや行事への村人、地域住民の参加が弱くなりつつあるように思われる。この波照間島でも、その感があるように言われている。

午後の部は、バンク（仮設舞台）芸能が演じられた。東組の踊りは、次の通りである。

①かぎやで風（大泊敦子、阿利美枝子）、②一番コンギ（狂言）（大泊正一、貝敷祐助、後仲筋清忠、野原仙也、加屋本伸光）③上り口説（大本睦子、野原増子）、④五月雨節（大泊伸枝、後仲筋初枝、新本直子、貝敷実千代）、⑤かりゆし（小山直子、大本エリ子、屋良部ゆき子）、⑥鳩間節（内間美恵子、屋良部美枝）。歌三線（三盛富造、田盛敏一）、笛（小山雅広）、太鼓（大嵩考成）

これらの演目は、毎年少しずつ出入りがあるようだ。『波照間島のムシャーマ』によると、

「仲里節」「前の浜節」「揚古見ぬ浦」「こてい節」があつて、八演目になっている。平成8年の際には「かりゆし」「鳩間節」と前の4曲が入れかわっている。定まった演目は「かぎやで風」「一番コンギ」「五月雨節」の3曲である。なお、昭和34年に見学した本田安次氏の『南島探訪記』（昭和37年、明善堂）を見ると、東部落の踊りとして、次の演目が記されている。

かぎやで風（2人）、下り口説（2人）、千鳥節（3人）、むんじゅる（2人）、赤馬節（2人）、仲里節（2人）、長刀（2人）、鳩間節（2人）、谷茶前（2人）、花風、川平節（2人）、松竹梅（3人）。

この頃の踊りからすると、ほとんどが入れかわっているようだ。

前組の番組は、①波照間島節（大泊君子、野原和子、煙草谷佳恵）、②前の浜節（西里恵美、金武百美子）、③鳩間節（西川良枝、稲福千鶴子）、④川平鶴亀節（越地敏子、山田メリ）。歌三線（前野恒子、仲間栄三、親盛啓介）、太鼓（大泊君子）。

ここでも以前の演目と異なり、出入りがある。以前には「かぎやで風節」ではじめられたことが、平成8年には「波照間島節」ではじまっている。「仲里節」も報告書の中には見られるが、平成8年は別の演目がいっている。前述の『南島探訪記』には、前組の演目として次の踊りが記録されている。

御前風（2人）、上り口説、千鳥節、鷺の鳥節（2人）、小浜節（4人）、鼓踊り（4人）、かなよ天川、蝶千鳥、（3人）、かしき（七尺節）（2人）。

この頃は、独特な演目があり、バンク（仮設舞台）もはなやいでいたようだ。

西組の番組は、①一番コンギ（仲底善副、大仲重一、大嶺光広、登野盛恒、岩崎 順、美里保優）、②波照間口説（崎枝珠美、仲白保美代子）、③鶴亀節（波照間良美、西波照間みどり）、④かたみ節（大嶺真奈美、西白保綾乃、西白保舞子）、⑤湊くり節（波照間いつ子、後富底多枝美）、⑥シヨンカネ小（富底由利子、祖平奈美）、⑦ゆがふ節（保田盛トヨ、西白保いずみ、本田幸子、大嶺末子）。歌三線（西島本米彦、後富底周二、崎枝秀二）、太鼓（大八木秀明）。

この組の番組の出入りも大きい。『波照間島のムシャーマ』で9演目あるが、それと共通するのは「一番コンギ」と「波照間口説」の二番で、他はすべてかわっている。こんなに入れかわっているのは、もう躍ることができなくなったのかと心配する。とくに「玉踊り」は、ひよっとするとご当地のみで見ることのできる独特な演目ではなかったかと思われる。本田安次著『南島探訪記』には「四丁節（玉踊り）」とあり、「二人。打掛、右肌ぬぎ、貫ねた玉を持つ。踊り様色々あり、最後に玉を捨ててそのまま振向きもせず、歌のうちに入る。美しい踊であった。『貫花』したもの。」と説明している。ついでに西組の演目を記すと、次の通りである。

かぎやで風（少女2人）、上り口説（2人）、んじゅぬき（2人）、歌劇大漁口説（7人）、波照間島節（4人）、鷺の鳥節（2人）、名護の大兼久節（4人）、歌劇波みん節（3人）、浜千鳥（3人）、十番口説（2人）、四丁節（2人）。

これらの演目は、他の組と同様。バラエティに富み、興味深いプログラムであった。なお、本田氏の上演順番は、西組、東組、前組と報告されている。

三組のバンク（仮設舞台）舞踊のしめに躍られるのが、東組の「コームッサー」である。出演は、貝敷祐助、加屋本伸光、勝連松一、野原仙也。音楽は唄が大泊正一、新城清喜、後仲筋清忠。笛が慶田本長幸、新城永佑、内原 勲、小山雅広であった。その後に、西組の「獅子の棒」（大嶺高輝、金嶺 至、富底義光、大仲 孝）、獅子舞（3組）が演じられた。

3組のムシャーマ行事が終ると、帰りのミチサネー（道揃い）が、東組、前組、西組の順であり、そのあとに当日の来賓、公民館役員による栈敷（シャースケー）でのユークイ（世乞い）があり、ミルク節とヤラヨー節がうたわれた。午後4時20分頃から退場し、一日の行事は終わった。

東組、前組、西組にそれぞれにミルが登場し、ミルクのナーリ（実）が共通してあるのは、五穀豊饒を乞い願う村人たちの強い気持が肥大化したもので、他の村落では見られぬ特異な行列といえよう。また、3組ともブーブザー（ミルクの夫といわれている）を入れてあるのも、この島の特徴といえよう。ブーブザーについて、『波照間島のムシャーマ』には、次のように説明されている。

弥勒は女性で、ブーブザーはその夫君だといわれ、弥勒に離縁されてその姿で行列の前後をかけ廻っているといわれるが、ブーブザは行列の進行の調整役をするものである。

（中略）ブーブザはミルクより前になってはいけないといわれている。（72ページ）

ミルクを女性で妻、ブーブザを夫というとならえ方は、後の考え方であろう。ミルクは豊穡をもたらして下さる尊い神としての象徴であろうから、性別はないのが本来の姿であろう。やはりミルクを先頭に、大きな行列を編成するので、ブーブザの役を設定して、滑稽さを加味させていったのであろう。村落の統率者の役をもっているように思われてならない。ミルクに対比するための一つの演出であろう。

波照間島の芸能は、農耕や漁撈と深くかかわる演目があり、以前にはアユ、ジラバ、ユンタが実に豊富にあり、節歌も数多く伝承されているので、これらが村人のものになるためには、さかんにうたわれ、演じられることをつづけてほしい。島を活性化するには、芸能をはじめとする年中行事のさかんなる実施とアピールが何よりだと考えている。竹富町指定の無形民俗文化財にいち早くなっているのも、その中心母体である芸能保存会が、町教育委員会に働きかけて、発表する機会を、島や石垣島、あるいは沖縄本島でもつことが大切で、それが今後の保存・継承につながるにちがいない。年一回のムシャーマだけでは、

島の人だけのものだという認識もそんなに深まらないように思われる。ぜひたびたび発表する場をつくり、島の出身者も含めて、共有の財産であるようにしてもらいたい。